

松陰の妹千代

吉田松陰には三人の妹があつた。

この三人の妹の中で、一番上の千代は、分けても松陰と睦まじかつた。三つちがひで年齢が接近してゐるだけでなく、杉家の貧困のさなかに生ひ立つたせいでもあらう。長兄の梅太郎と松陰と千代とは、杉家の山宅さんたくで父母の辛苦の有様を、朝に夕に具さに眺めつゝ、たがひに助け合ひ、勵まし合つて、育つて來たのだ。

あるときは、庭の隅で落葉のなかを掻き分けて椎の實を探したこともあるし、あるときはまた、兄弟三人打揃つて松茸狩にも行つた。何事をするにもはなればなれになるといふことはなく、一人が言ひ出せば、すぐに賛成して行動をともしにする兄弟だつた。

千代は女であるだけに、子供のときから、よく母の手傳ひをした。炊事のことから洗濯に至るまで、母の片腕となつて働いてゐた。天保十四年に藩政の大改革があつて、清廉潔白の人格者たる父百合之助が、百人中間頭兼盜賊改方といふいまの警察署長のやうな役人に抜擢はくたくされてからは、その職務上、千代と仲間一人ちのべけんを連れて、城の近くの江向に移り住ん



伊賀上茂

涙袖帖

往年の志士玄瑞を偲ぶ
袖に涙の形見



久坂の手紙は、元治元年六月六日附を最後として終つてゐる。それから後、遂に故郷に歸らず妻にも對面の時なく、その同じ月の十六日に義軍を統率して、三田尻を出發し、大阪を経て山崎の天王山に進み、こゝで長州藩入洛の最後の交渉を開始したのであつた。

彼こそは、松下村塾では松陰門下の一偉材、京都に出れば、長州勤王黨の代表として、志士の棟梁株となり、江戸に行けば、そこでまた他藩士との提携に重きをなす人であり、一軍を率ゐれば、部下が悦んで推服するほどの名將の器であつた。のみならず蘭學に通じ、漢學に長じ、詩文にも和歌にも素晴らしい造詣をもち、彼の才能は往くところ可ならざるはなき稟質を示してゐた。その玄瑞の家庭の人としての半面は、この一束の書簡集につきてゐる。

楫取素彦は、この久坂の手紙を、最後まであかす讀み耽つてゐたが、往時の追懷と思慕の情に堪へぬらしく、幾度も老ひの眸を濡らしてゐた。やがて書簡を整

理し終つた素彦は、早速、製木屋に命じて、清楚な装幀を施した。

そしてある日――。素彦は書簡集の表題を撰ぶために、硯をひきよせて筆の穂を嚙みしめてゐたが、やをら筆を興して、『涙袖帖』といふ三文字を書きつけた。

涙袖帖――これぞ美和子にとつては、往年の志士玄瑞を偲ぶ袖に涙の形身であり、それと同時に、素彦にとつてもまた、勤王の苦闘に喘ぎつゝ具さに嘗めて來た艱難辛苦の、そのかみの同志久坂を慕ふ男らしい袖に涙の記念だつたのだ。

『あゝ、これで自分も久坂に一分の申け譯が立つ』
 濃厚そのものゝ素彦は、誰にともなくひとり呟いて、しづかに筆を投じるのであつた。





久坂玄瑞とその妻『涙袖帖』のこと

作家 秋山香乃

久坂玄瑞の妻——「お文さん」と聞いて真つ先に浮かぶエピソードがある。松陰が愛弟子玄瑞の将来に期待し、歳の離れた愛妹文子を嫁がせようとしたときの話だ。玄瑞は、こともあろうに、文子が不美人だからと一度は断ろうとしたというのである。嘘か本当かは、わからない。歴史上の有名なエピソードは、実際は後世に作られたものであることが多いからだ。

それにしても、妙な逸話が伝わったものだと気の毒に思う。これでは文子があんまりだ。残念なことに、松陰の妹であり、玄瑞の妻でもある、高名な二人に挟まれて過ごした稀有な女性文子が、このエピソード以外で表だって語られることは、ほとんどない。

それが……文子を中心に綴られた物語があったのだ。本書『涙袖帖』である。これは大きく二篇から成り立つ。前篇は、「久坂玄瑞が愛妻文子に与えた一束の手紙を基にして」真の勤王志士の姿と、夫のはたらきに己のすべてを捧げつくした妻の姿を、「物語風」に描いている。そして後篇は、文子の兄吉田松陰が、「愛妹見玉千代に与えた教訓」に、わかりやすく解説を加えたものである。

筆者は、伊賀上茂氏だ。驚いたことに、昭和十九年という太平洋戦争の真つただ中、本書は発行されている。そのためか、『涙袖帖』に戦時の思想の影響は、色濃く出ていると言わざるを得ない。筆者が本書を記したのは「日本婦道の道標」を著したからであり、物語の冒頭の文子のけなげな姿は、涙を隠して太平洋戦争で夫を送り出す昭和の妻たちの姿と、どうしても重なってしまう。それはそれで、戦時の我が国の空気や思想を知る貴重な手がかりと成り得るが、純粹に幕末の物語の一つとして手にしたときは、やはり気が散るといふべきか。本書の数少ない瑕疵の一つだろう。

しかし、読み進めるに従い、読者は玄瑞の峻烈な生き方に息を呑み、その死に様に胸を打たれ、すぐに物語の世界に没入していくことになるのだ。

少し詳しく見ていこう。物語は玄瑞の死——禁門の変から始まる。玄瑞は長州勢の若き指導者の一人として進発には反対しつつも、古参の来島又兵衛らの激烈な主張を押え切れず、京への進行を決める。前夜、朝敵の汚名を雪ぐ嘆願の望みは捨てぬものの、死を覚悟した玄瑞は、友らと水杯を交わした。直後、叩き込むように筆者は鋭い筆致で戦乱へと長州勢を突入させる。諸藩が討伐と称して長州方へと襲い掛かる。周りが敵だらけの中、膝を爆裂弾の破片で抉られた玄瑞は、もはや是非がないことを悟る。長州は負けたのだ。立て籠もった前関白鷹司邸が炎に包まれる中、玄瑞が自刃へと追い込まれるのは歴史の通りだ。が、これまでに目にした玄瑞の最期を描いたどの作品よりも、この『涙袖帖』は鮮烈だ。ここで詳細に述べるわけにはいかないが、松門の絆の深さに瞠目し、友らと交わす玄瑞の会話に目頭が熱くなる。そして、玄瑞は妻文子へも思いを馳せるのだ。結婚して八年、そのうち共に過ごしたのは正味二年。文句ひとつ言わなかった文子へ、玄瑞が最後に何を思ったかは、ぜひご自身で目にしてみたい。

玄瑞の死後、文子は長い時を経て、玄瑞とは「骨肉以上の深い関係に結ばれた同志だった楫取素彦に再嫁する。素彦も再婚だ。夫を亡くした文子と、妻を亡くした素彦。互いに愛する者を別に持ちつつ結ばれた二人のやり取りが秀逸だ。先夫、玄瑞を忘れられず、その遺品を抱いて「まるで奉公人にでもなる気持ちで」嫁ぐ文子。一方、そうと知って受け入れた素彦も先妻が忘れられず、二人は互いに同じ傷を持つもの同士、静かに穏やかに労わり合う。こんな夫婦の形も確かに在るのだと頷きつつ、どうにも切ない気持ちにさせられる。何といっても素彦の先妻は、文子の姉、壽子なのだ。長い物語ではないが、

何とも複雑に人情が絡み合っているではないか。

一見、風いだ湖面のような波風のない夫婦の、互いに腫物を扱うような緊張した関係は、とある文子の行動から一変する。玄瑞の手紙をこっそり焼いて自分の気持ちにけじめをつけようとしたのだ。その姿を見てしまった素彦。直後に素彦の行った行動と文子に掛けた言葉は、何度読み返しても胸がじんと熱くなる。間違いなく本書の山場であり、一番の読みどころだろう。ここでは、お叱りの嵐に違いない。

『涙袖帖』は文子の物語であるが、同時に千代や壽子ら三姉妹の物語でもある。光が強ければ、影はよりくつきりとした輪郭を持つ。彼女たちは物語の中でそれぞれ強い光を相手に、濃い影となって存在感を放つ。千代には兄の松陰。壽子には夫の素彦。文子には玄瑞。運命に散り、あるいは翻弄されつつも道を開いた男たちを鮮やかに照らし出すことで、その影で常に歯を食いしばって笑みを絶やさず支え続けた女たちの献身と、彼女たちの香り立つ瞬間さえも、筆者は松陰の三人の妹を軸に見事に描いてみせるのだ。それゆえ、ここに登場する三姉妹は、みなはつきりと性格が違う。笑いどころも泣きどころも違う。同じものを見ても違うことを感じている。通り一遍の造形ではないゆえ、ただの薄っぺらい物語上の女たちでなく、生きた女として、読む人それぞれに何かしらを語りかけてくれる。だが何を語りかけてくるかは、読む人のそのときの有り様によってきつと変わるのだろう。

本書には他にも楽しみがある。読者は、意外なまでに人間らしい松陰の姿を読み取ることができる。だろーし、彼の好物が何かを知ることでもできる。さらに松陰が胎教のことを語る個所は、新鮮な驚きと共に頁を捲ることができると違いない。『松陰』を読みたい人にとっても、本書は優れた読み物なのだ。



目次

涙袖帖

- まへがき
- 下僕帰る
- 武人のつね
- 月下の決別
- 痛ましき敗衄
- 黄菊の秋
- 因み會
- あねいもと
- 玄瑞の手紙
- 大いなる愛情

女誠

- 松陰の妹千代
- 友愛に哭く
- まことの心
- 先祖の崇敬
- 神明の尊崇
- 親族の和
- 孝子を育つる基
- 心のさび
- 新年の意義
- 小春日のたより
- 燃ゆる熱情
- 女丈夫、曹大家
- 卑弱篇
- 夫婦篇
- 敬慎篇

婦行篇

- 専心篇
- 曲從篇
- 和叔妹篇
- 暴風前後
- 最後の訓誡
- かなしき霖雨
- 日本の母
- 卑弱 第一
- 夫婦 第二
- 敬慎 第三
- 婦行 第四
- 専心 第五
- 曲從 第六
- 和叔妹 第七

▼昔から久坂玄瑞ファンの女性が店に来ると必ずと言って良いほど『涙袖帖』を熱心に探していましたので、私は本書の存在を早くから知っており、今でもここにもない本だと思っています。

▼でも不運な宿命に散った玄瑞の生の声を伝える稀書に「限定〇百部・特価〇万円」の高額本はどうしても似合わず、小社としては「どなたにもお求め易い普及版」で復刻させて頂きます。

▼本書刊行の昭和十九年頃、用紙は不足し紙質も極端に悪く、印刷・製本工は戦争に駆り出され、最悪の本ばかり。小社では時間をかけて本書を二冊も揃え両方を潰して、やっと何とか後世に遺すことのできる本になりそうです。

(似た本に「久坂玄瑞の妻―涙袖帖」田郷虎雄著・昭和18年刊もありますが、比較の対象になりません。)

■体裁 A5判三一〇頁 並製箱入

■特価 四千元(税・送料)

■定価 五千元(税・送料)

■特価締切 四月十日

■発売 二十六年五月中旬

山口県周南市銀座2-13

電話 〇八三四〇二九五

マツノ書店